華岡青洲の外科医術を学んだ美作地方の医師たち

佐々木　　勇

美作大学・美作大学短期大学部紀要（通巻第68号抜刷）

美作大学・美作大学短期大学部紀要
2023, Vol. 68. 101～109

報告・資料・研究ノート

華岡青洲の外科医術を学んだ美作地方の医師たち

Learning Surgery Under Seisyu Hanaoka's Wing: Mimasaka Area Doctors

佐々木　　勇

キーワード：華岡青洲、春林軒、合水堂、緒方洪庵、適塾、麻酔薬

はじめに

文化元（1804）年10月13日に、世界で初めて『通仙散』（漢方薬で、チョウセンアサガオなどから調合したもの）による麻酔薬を使って、全身麻酔による手術を行った華岡青洲（1760-1835）は、和歌山県では大変偉大な「医聖」として尊敬をされている[1)]。1846年にアメリカのモートン（William Thomas Green Morton 1819-1868）のエーテル麻酔による手術の40年程前の快挙であったと評されている[2)]。

青洲の外科医術だけでなく、謙虚でおごらない人格者として人のために尽くすという人柄が、現代にも強く人々の心を打ち、人間性が脈々と受け継がれている。

図１は青洲が診察や活動をしたと言われている、周辺の紀の川市立上名手小学校の遠景である。この小学校の周りは近くに紀の川が流れ、ドイツのナウマン（Heinrich Edmund Naumann 1854-1927）の名付けた「中央構造線」が九州地方まで伸びている。その紀の川の河岸段丘上にある上名手小学校では、青洲に関する講演会を催したり、様々な活動が行われていたりしている。周辺はほとんどが柿の木やミカン栽培が行われているのであるが、収穫期にも関わらず何か行事があると多くの人が集まるところに興味を惹かれる。

図１　紀の川市立上名手小学校遠景
（上名手小学校提供）

先日、青洲の絵本を使った地域の方による「読み聞かせの会」があったので参加をさせていただくと、小規模の学校であるがスタッフがたくさんおられ、それはもうとても気持ちがこもっていて、情景があふれてくる大変上手な読み聞かせであった。今、文部科学省が言うところの「地域学校協働活動」の典型であると感じた。道徳の授業にも関わる学習計画が組まれていた。青洲の生き様を知り、自分はかけがいのない人であり、仲良く、助け合い、楽しくする心を育み、さらに地域を愛し、ふる里を愛する子どもたちを育てようとする姿は、まさしく青洲の心や生き様につながるものと思われた。

１　華岡青洲の外科医術と当時の医学界

（１）華岡青洲の春林軒における外科医術

青洲は、宝暦10（1760）年に現在の紀の川市西野山字平山で生まれた。図２は青洲の

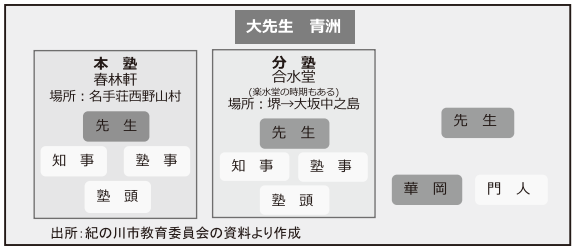
図２　華岡青洲像
（紀の川市の撮影許可
2021. 3 .11）

銅像で、自宅・医学塾・診療所でもある「春林軒」の前にある。春林軒の西門から中に入ると、図３のように右手に門下生の部屋があり、薬の製剤所、貯蔵所、馬小屋、病室へと続く。そして、左手は母屋で土間、居間、客室などへと続いている。ここまでの施設を見ると、青洲は医術だけでなく施設の配置や設計に関しても、かなりの知識があったように思われる。例えばトイレは「沈殿式汚水浄化槽」という２つの桶をつないで、上澄み液を作って流し、沈殿したものは定期的に捨てるという方式を取っている。

母屋の建物には、診療室、手術室、薬調合室、奥居間などがあり、貧富を問わず治療に当たり、「自分は何の富貴栄達も望まない。自然豊かな田舎に住んでいるが、ひたすら思うことは病人を回生させる医術の奥義を極めたいということ」[3)]というようなことを心情としていた。

この春林軒で学んだ門下生は、表１にもあるように

図３　春林軒の塾跡
（紀の川市教育委員会の撮影許可2021.３.11）



出所：紀の川市教育委員会の資料より作成

図４　医塾の組織

表１　春林軒及び合水堂の国別門人数

国　名	人　数	国　名	人　数
陸　奥	７１	出　羽	３１
佐　渡	８	越　後	１４
下　野	６	常　陸	３６
上　野	９	安　房	１
上　総	７	下　総	１０
武　蔵	２６	相　模	０
甲　斐	８	信　濃	３２
伊　豆	３	駿　河	１０
遠　江	２５	三　河	２１
尾　張	３６	美　濃	５０
越　中	３７	能　登	５
加　賀	６３	越　前	２６
若　狭	１０	近　江	３４
伊　勢	４１	志　摩	４
伊　賀	１６	山　城	４２
大　和	４２	河　内	２９
紀　伊	１６９	和　泉	２２
摂　津	７３	丹　波	３２
丹　後	１３	播　磨	１０６
但　馬	１６	因　幡	２８
伯　耆	５２	美　作	３７
備　前	５３	備　中	７４
出　雲	３７	石　見	２７
備　後	１７	安　芸	２１
周　防	３１	長　門	２４
讃　岐	５８	阿　波	５５
伊　予	１００	土　佐	１００
豊　前	２０	豊　後	４８
筑　前	７２	筑　後	２４
対　馬	１	壱　岐	０
肥　前	９９	肥　後	１５
日　向	２１	大　隅	１
薩　摩	１４		

出所：紀の川市教育委員会
「華岡青洲展示室」資料より作成

当時としては大変な数であったことが分かる。和歌山県紀の川市にある華岡青洲展示室によると、医塾の組織は図４のように本塾である青洲の春林軒は名手荘西野山村字平山にあった。青洲膝下の門人として、美作地方の出身者に14人が挙げられている。そして、分塾が大坂の中之島にあり、合水堂（「がっすいどう」とも「ごうすいどう」とも言われる。また「楽水堂」と

呼ばれた時期もある）と呼ばれていた。

出張所は和歌山の南休賀町にあった。展示室の資料によると、春林軒及び合水堂の安永９（1780）年から明治15（1882）年の門人数は2,255人を数えており、江戸時代最大の医塾であった。春林軒には門人や患者は、「雲水」のように集まった。なぜ各藩の藩医やその子息等が春林軒に学ぶようになったのかというと、青洲が通仙散により前述のとおり世界で初めての全身麻酔による外科手術を行ったからである。

青洲の地元の郷土史家等の研究では、この麻酔薬の調合には生命に関わるために大変な苦労を重ねて、約20年もの間に犬や猫などの動物実験を繰り返したという[4)]。そのため、地域からは犬や猫がいなくなるほどであったという[5)]。その後、人体実験をするのであるが、なかなか検体が見つからない。そういう理由で、見かねた家族の中から青洲の妻である加恵と、母の於継が全身麻酔薬の実験台になる。そして、妻の加恵は後年失明し母は亡くなってしまう。この妻と母の献身的な協力によって、通仙散は完成したのである。

その後、青洲は亡くなるまでの31年間に、153例にも及ぶ乳癌の手術をしただけでなく、外科、整形外科、泌尿器科、耳鼻科、眼科、産婦人科などの手術をしている[6)]。全身麻酔を成功させた青洲の名は全国に知れ渡り、雲水のごとく春林軒に患者が押し寄せ、それと共に門下生が殺到したのである。

通仙散の投与量、投薬、投与に際しての患者へのチェックなどは厳しいものがあり、塾の罰則、規則、規定などには、考えられないほど厳しいものがあった。華岡流医学を門下生にだけ伝え、たとえ親兄弟であっても伝えてはいけないという門外不出である。それは、外科手術を正式に学んだ者以外には取り扱いが非常に厳しいものであることや、自分の妻や母の犠牲の上に発明されたものでもあるので、当然のことであろうということが医学関係者の中では言われている[7)]。

また、青洲は治療をするに当たって、治療の説明と同意を求めるという、今で言う「インフォームドコンセント」を先駆的に行った医師であることが青洲の里

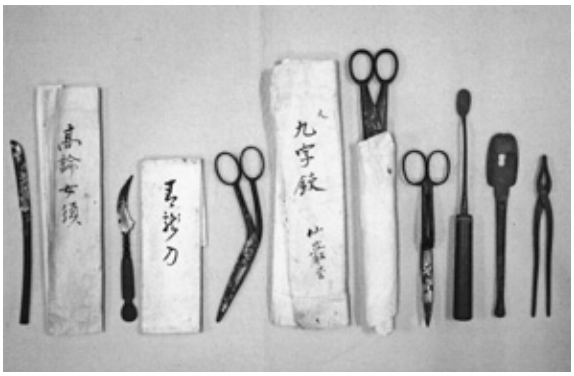


図５　華岡流の医療器具（山田信夫氏所蔵）

展示室資料に示されている。

青洲を調べてみると、手術着の工夫であったり、図５のようなコロンメスの創作、バヨネット型剪刀を創案したり、また医術だけでなく、施設の建設、漢詩や、書家として残している作品などを見たりすると、あらゆるものに秀でたものが見られる。今で言うマルチ人間と言える人物である。そして、青洲の偉大さは、生活ぶりは質素で、豪華な調度品というものは使わないで、藩主から娯楽を聞かれて「何もありませんが、強いて申せば人助けです」と答えるなど、人々をいとおしみ慈しむ心を貫いているところである[8)]。

青洲の里付近には小さな池が散在しているが、米作りのために池も造っている[9)]。当時は逃散する農民もいるために垣内（かいと）池が造られているのであるが、その石碑は難しい文字ではなく人々が読みやすい文字で、

図６　和歌山県立高等看護学院（2022.10.６撮影）

「水みたば　心をこめて　田うへせよ　いけの　むかしを　おもひ　わすれず」と書かれている。これを見ても青洲の人柄が偲ばれる。

図６は春林軒の近くにある和歌山県立高等看護学院である。この一帯は青洲ゆかりの地であり、看護師養成の学校であるが、丘陵地で周りは田園地帯の中に建てられている。このような施設が県庁所在地ではなく、青洲の里にあることも和歌山県民が青洲を医聖として今も慕っていることがわかる。

（２）大坂中之島の合水堂と緒方洪庵の適塾

青洲が麻酔薬により乳癌手術に成功した文化元（1804）年以降の春林軒の規模は、県文化センターの発掘調査等によると、手術成功前後で敷地面積は約3倍増加しているそうである[10)]。これだけ大きくなったことから、患者や華岡流医学を学ぶ門人のために、文化14（1817）年に大坂中之島に春林軒の分塾の合水堂が造られた。ここでの診察と門人の指導を担当したのが青洲より19歳年下の弟の華岡鹿城（ろくじょう）（1779-1827）であった。合水堂はその跡地に青洲と鹿城の子孫、日本医史学会、日本麻酔科学会によって図７のような「合水堂　華岡流外科顕彰碑」が建てられている。

この碑文によると、鹿城が亡くなりさらに青洲が亡くなった後に、青洲の養子である南洋が大坂に移って合水堂を支え、華岡流外科の門人数は安永９（1780）年から明治15（1882）年の約100年の間に、総勢2,200人になったと書かれている。最先端の医術や医学知識を学ぼうと全国各地から集まった門人の数は約半数が合水堂で学んだ。

図７　合水堂 華岡流外科顕彰碑（2022.10.６撮影）

図８　緒方洪庵の像
（大阪大学適塾記念センターの撮影許可2022.10.６）

当時の合水堂の塾生について、「服装は立派で我々蘭学生の類ではない。往来で会っても言葉も交えず、互いににらみ合って行き違う」と適塾に通っていた福沢諭吉が晩年に言ったそうである[11)]。このように、合水堂と適塾の塾生は互いに対抗心を持っていたようである。この頃の合水堂は適塾より塾生や患者数が多く、華岡流は幅をきかせていたようである。合水堂の南洋と緒方洪庵とは険悪ムードとは関係なく、かなり情報交換などができていたということである。

図８は適塾を開いた緒方洪庵の像である。適塾は大阪大学の前身でもあり、大坂船場に蘭学の塾を開いたものである。合水堂とは近くにある。塾生を見ると、慶應義塾の創始者である福沢諭吉、福井藩の安政の大獄で死罪になった橋本左内、洋学者・教育者でもある箕作秋坪、大鳥圭介などがいる。塾生が郷里に帰っても、地域医療だけでなく多方面の分野で活躍をしているのが適塾である。

表２は適塾の門下生の都道府県別出身を表したものであるが、遠方からでも多くの人材が集まっているのが分かる。幕末から明治初期における、各藩の教育や医療などにおける力の入れ方が分かるものである。

表２　都道府県別適塾入塾者数

都道府県名	人　数	都道府県名	人　数
北海道・東北			
北海道	2	岩　手	4
秋　田	1	山　形	１３
宮　城	4	福　島	6
関　　東			
茨　城	6	栃　木	1
群　馬	2	埼　玉	1
東　京	１８	千　葉	7
神奈川	3	山　梨	3
東　　海			
愛　知	8	三　重	8
岐　阜	１４	静　岡	１５
信 越・北 陸			
新　潟	１１	長　野	2
富　山	3	石　川	３３
福　井	２５		
近　　畿			
滋　賀	3	京　都	２６
大　阪	１９	奈　良	6
兵　庫	３３	和歌山	１２
中　　国			
鳥　取	１１	島　根	１４
岡　山	４６	広　島	３１
山　口	５６		
四　　国			
香　川	５８	徳　島	５５
愛　媛	１００	高　知	１００
九　　州			
福　岡	３３	大　分	２１
佐　賀	３４	長　崎	２０
熊　本	9	宮　崎	6
鹿児島	9		

出所：「大阪大学適塾記念センター」資料
「適塾塾生」より作成

図９は適塾の外観であるが、間口約12m、奥行き約40mで、間口は狭く奥行きが広いいわゆる鰻の寝床のような造りとなっている。主に表屋と母屋に分けられており、２階建ての表屋の１階を塾生の教室、２階を塾生の部屋としてある。この中で多くの塾生が学んでおり、塾生の多くは苦学生であり、純粋に学問に努めていたようである。

図９　緒方洪庵の適塾
（大阪大学適塾記念センターの撮影許可2022.10.６）

このように外科と内科、漢方と蘭学といった和洋折衷を学んだ塾生は各地に帰り、仁術を持って医療をしたのである。

２　華岡流医術を学んだ美作地方の医師たち

（１）江見梅之助

江戸後期になると、美作地方からは医学を志し、遠方まで修行に行く者が出てきた。前述した、この頃分塾の合水堂・和歌山市内の出張所等に入門した。

華岡青洲展示室の華岡青洲顕彰会による資料では、安永９（1780）年～明治15（1882）年までの門人録によると、美作地方からは37人とある。この中に、現在の美作市赤田に生まれた江見梅之助（1832～1855）がいる。大原町史によると嘉永６（1853）年３月16日に春林軒に入門している[12]が、若くして亡くなっているので、その後のことは分からない。江見家の診療については何代か後まで続いており、父親の貞造はとてもよい医者であったということで、家は庄屋もしていた。

図10からも分かるように、診療所跡が左の民家のあるところで、当時は藁葺きの２階建てで、大きな家であったそうである。右手の石垣の２段目が江見家の墓地で、中程に梅之助の墓があり、右手が貞造の墓で、左手の方に８基ほど小さな墓があるが、それは使用人の墓ということである。墓の中に家訓が彫られている

図10　江見家の診療所跡（2022.10.6 撮影）

ものがあった。

「菰着ても　我が名汚すな　こどもたち」である。説明をしてくださった子孫の方は、親から「先祖の墓の方に足を向けて寝るな」とよく言われたそうである。

（2）岩崎忠之助

現在の美作市川上に生まれた岩崎忠之助（1832～1867）は、合水堂に入門している。入門後は地元において内科外科の医院を開いており、仁術を持って知られたそうである。図11は岩崎家の屋敷跡である。今はそこが何であったか分からない程、雑木に覆われている。古い地図には、大きな屋敷跡である図面が見られた。

図11　岩崎家の診療所跡（2022.10.6 撮影）

（3）山田純造

現在の美作市海田に生まれた山田純造は、安政3（1856）年4月に合水堂に入門している。

帰郷した純造は、本人のみでなく三兄弟の医療については評価が高く、美作地方一円や近隣の兵庫県からも診察に訪れる人が集まり、診察日には診療所である図12の仙巌堂の前の道には市も立つほどであったという[13]。

華岡門で学んだ塾生は、卒業して故郷に帰る際に木版画で印刷した青洲の自画像の上に、次のような4行詩が書かれている図13の書が与えられている。

竹屋蕭然烏雀喧	風光自適臥寒村
唯思起死回生術	何望軽裘肥馬門

門下生の全員がもらえるというのではなく、逸材の人物に与えられたのであろう。ちなみにこの書は、岡山県内に1点しか確認されていないようである[14]。

図12　山田純造の生家と診療所（仙巌堂）
（2021.3.4 撮影）

この意味は、「私の住んでいるこの田舎の村は、家の周りに烏や雀がやかましいほど鳴いている。（略）唯思うことは治せなかった病気を治すことだけである。どうして軽い着物を着たり、肥えた馬に乗ったりするようなことはしたくない」[15] というような言葉を贈り、これからの医療に精進するようにということを伝えている。

図13　華岡青洲肖像画（山田信夫氏所蔵）

（4）鷹取一郎

現在の勝田郡勝央町美野に生まれた鷹取一郎は、明治4（1871）年3月10日に紀州の華岡塾に入門をしている。鷹取の家は初代寿民→2代文哉→3代一郎→4代日夫→日夫の長男の麟太郎が早世して、現在は診療をしていない。図14の正門の左に馬屋があり、馬に乗って診察に行っていた。右にある部屋は書生部屋である。

図15の正門の上にある2個のフックは、診療に行く際の籠を吊す場所である。

一郎は大変な酒好きで、夜、馬で診察に行き、帰り道が分からなくなり同じ道を何回も回ったり、夜中に

図14　鷹取家の診療所跡（2022.10.31撮影）

図15　長屋門の上の籠を掛ける場所（2022.11.3撮影）

急患に出て無事終え、たくさん謝礼をもらい帰って妻が入れ物を開けると、木の葉がいっぱい入っていたりするなどエピソードも多い。一郎は医療活動もするが、吉野村の初代村長をするなど地域に貢献をし、大変慕われていたそうである。

鷹取家の玄関を中に入ると土間があり、左手に薬の調合をした薬部屋があり、右手には6畳ぐらいの患者の待合室がある。その右手の明るい部屋が診療室になっている。

待合室の上には、図16の「活物究理」の額が飾られている。この書は青洲が書いたものではなく、かなり後に別人が書いたものであるが、青洲は書家としても素晴らしい多くの作品を残している。特に重要な文言は「活物究理」と「内外合一」だそうである[16]。文化

図16 「活物究理」の額（鷹取たつた氏所蔵）

図17　久原家の墓（2022.12.31撮影）

人としての華岡青洲が想起される。「活物究理」とは、物事の真理や実態を見抜くということは、物事をじっと見つめなければならないのである。つまり、よく観察をしなければならないということであり、それでも分からなければ実験などによって見極めねばならないと言っている[17]。

また、「内外合一」とは内科と外科というように分けるのではなく、どちらも知識をわきまえておかなければ医療技術は行えないということを言っている[18]。このような書が遠く離れた美作地方にも掲げられているのである。ここでも、医塾である春林軒で地域の医療に従事する医者を育てるだけでなく、人を育てるという大きな貢献をしていることが感じられる。

（5）久原洪哉（こうさい）

津山藩医であった久原家は、代々華岡塾で学んでおり、婿養子に入った洪哉も同様に合水堂で学んでいる。

特に洪哉は、津山藩の最後の藩主である松平慶倫（よしとも）公の夫人儀（のり）姫の、乳癌の手術を明治3年頃に行ったことでよく知られている[19]。藩主婦人が乳癌であることが当時は極秘扱いとされており、どのように手術をしたかとか、薬品を使ったかも分からないが、華岡流の医療技術が活かされていることは、まず間違いないであろう。

津山洋学資料館には乳癌の手術をしたお礼に儀姫から贈られた素晴らしい打ち掛けが展示されている。図17は、華岡塾で学んだ久原家の代々の医者の墓が並んでいる。

おわりに

江戸時代末期から明治初期にかけて、我が国では華岡流の医療技術を求めて全国から和歌山や大坂に集まって来た。適塾も同様であるが、どちらも次第に終焉を迎えることになった。華岡塾は、西洋文化の流入によって様々な場所で、医療技術を身に付けることができるようになったことと、適塾は大阪府医学校となってそれぞれの時代の終わりを迎えるのである。

華岡流の医療は医術だけでなく、人となりという生き方を示している。だから、今でも華岡流の生き方を学ぼうという人がいたり、顕彰する人がいたりするのであると思われる。

この時代の地方の医療について触れると、診療に来る患者の診察の他に訪問治療を行っていた。当時の地方にあっては、診療をするのに馬だけでなく、籠を利用しているのが分かる。久米町誌によると、女医として有名な光後玉江（1830-1905）は、1日にかなりの距離を往診しており、その往復には籠を使用している。担ぎ手が4人～6人いて、遠路や悪路を往診に行っている[20]。

治療代については、払えればよいが払えない場合は、免除ということもよくあったようである。しかし、何回も繰り返し支払いを怠った場合に、庄屋がそ

の間に入って取り立てをした例が、大原町誌に見られる[21]。治療の払いに庄屋が出たりするなど、いろいろな問題や課題があるが、当時の人の温かさを感じる医療時代である。

当時の医者は、地域に貢献をするということが多く見られる。例えば地域の要職についたり、地域から相談事を頼まれたりするなど、頼りにされる人材でもあった。患者を診察しながら弟子に医術を教えたり、寺子屋で地域の子どもたちに指導をすることもあったりしたようである[22]。また、私財を投げ打って地域のために事業を行うこともあったようである。今でいう何でもできる「マルチ人間」である。

「医は仁術」と言って、自分の身を粉にして人命を救っているのが、江戸末期から明治初期にかけての時代であった。

＜引用文献＞

1）上山英明『華岡青洲先生　その業績とひととなり』一般財団法人青洲の里、1999年、pp.31-33。
2）吉見誠一「麻酔の歴史～全身麻酔の始まり～」（『高知赤十字病院医学雑誌』第20巻第1号、2015年）pp.65-66。
3）前掲1）、pp.76-77。
4）同上、pp.11-12。
5）同上。
6）前掲2）、p.65。
7）前掲1）、p.63-66。
8）谷脇誠『医聖華岡青洲の生涯』紀の川市那賀地区公民館、2021年、pp.190-191。
9）前掲1）、pp.79-81。
10）「範は紀州史にあり わかやま教育今昔」（『毎日新聞』2013.6.19）。
11）同上。
12）美作市・美作市教育委員会『大原町史　通史編』大原町史編集委員会、2008年、pp.472-473。
13）津山洋学資料館『山田純造生誕180周年記念　海田の医家　山田家の人と学問』2016年、p.4。
14）同上、p.14。
15）前掲1）、pp.76-77。
16）同上、pp.78-79。
17）同上、p.78。
18）同上、pp.78-79。
19）山陽放送学術文化財団『岡山蘭学の群像3』吉備人出版、2018年、pp.46-47。
20）美咲町『中央町史　通史編』美咲町史編さん委員会・中央町誌編集委員会、2022年、pp.688-690。
21）前掲12）、p.470。
22）前掲20）、p.684。

＜参考文献＞

梅渓昇『緒方洪庵と適塾』大阪大学出版会、1996年。
梅渓昇『緒方洪庵』吉川弘文館、2016年。
大阪大学出版会『新版　緒方洪庵と適塾』2019年。
有吉佐和子『日本文学全集45　有吉佐和子・瀬戸内寂聴』新潮社、1971年。